

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Use of hunter support programs and social change of Nunavik Inuit

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5796

ヌナヴィク・イヌイットのハンター・サポート・プログラムの運用と社会変化

岸 上 伸 啓

1. はじめに

人類の社会はつねに変化しているが、その変化の過程や特徴については時代や地域によって多様性がみられる。これまで「狩猟採集民」と呼ばれてきた人々は、大航海時代以降、激しい社会変化を体験してきた人々である。彼らの多くは消滅したり、外的な力によって変容を余儀なくさせられた。

現在でも、ロシアのシベリア、北米の極北や亜極北地域、オーストラリアやアフリカには、「現代の狩猟採集民」が国家の中に組み込まれたり、隣接のグループと経済的な関係を保ちながら、生活を続けている。かれらの中には、都市に移動したり、農耕や牧畜の仕事に半永続的につくなど、狩猟採集活動をやめたポスト・フォーレージャー(post foragers)の数も近年増加しつつある。1998年の時点で、いわゆる狩猟採集民社会は、消滅していくか、それとも形を変えながらも存続していくかの岐路に立っているといえる。

ここでは、狩猟採集民の事例としてカナダ国ケベック州極北部ヌナヴィク地域のイヌイット社会を紹介する。そしてその事例を通して、私は、国民国家の中で生活している狩猟採集民社会が存続していくためには、かれらと政府との間で協議され策定される生業維持政策の実施と、彼ら自身の能動的な生業活動の実践が必要であることを主張したい(岸上 1996a, b)。

2. カナダ・イヌイット社会の変化と生業モデル

現在、イヌイットやユピックなど「エスキモー」と一括して総称されてきた人々は、ロシア、合衆国、カナダとデンマーク領グリーンランドの国境に分断されている。極北民といっても環境、欧米社会との接触のしかたや主流社会の政策に違いがみられ、彼らの社会変化にも地域的多様性が見られる。同じカナダ国内に住むイヌイットであっても、ユーコン準州や、ヌナウト(かつての北西準州の中部および東部)、ヌナヴィク(ケベック州の極北部)、ラブラドルでは、社会変化に違いが見られるし、同じ地域内でも大規模村と小規模な村では社会の変化には違いが見られる(注1)。

これまでのイヌイット社会の変化に関する研究には、社会変化を強調するモデルと社会の持続を強調するモデルの2つが存在する(岸上 1994)。前者のモデルは1960年代の研究に多く、後者の研究は1980年代以降に多く見られるようになった(注2)。前者から後者への変化は、イヌイット社会が大きな変容を遂げつつあることを認めた上で、生業の存続が社会の再生産的变化を可能とし、かつ生業の存続と商品経済への接合が必ずしも相矛盾するものではないことがわかってきたからである。

カナダ・イヌイット社会の変化は、その社会の中での生業活動の活力や衰退と深く関わっている。ウエンゼル(1991)らの研究からイヌイットの生業とは単なる食料獲得活動ではなく、社会経済システムであることが認識されるようになった(注3)。

イヌイットの生業とは、主に親族関係や狩猟パートナーのような特別な社会関係によって組織される食料獲得活動と分配からなる社会経済システムである。食料獲得活動は、特定の社会関係に基づいて組織され、協同して行われる。そしてその成果として得られた獲物は特定の社会関係に沿って分配され、消費される。このように社会関係と食料獲得活動と分配活動は相互規定の関係にある。すなわちこの関係が保たれている間は、社会は変化しつつも基本的には再生産され続けることになるのである。さらに生業活動には、民俗知識や世界観、民俗技術が深くかかわっている。生業活動の実践は、イヌイットの文化や技術の再生産とも相関関係にあるといえる。

イヌイットの社会を大きく変えたと考えられてきた毛皮交易は、イヌイットの生業と相矛盾する経済活動ではなく、条件さえ整えば生業の維持に貢献してきたとさえいえるのである。1960年代以降のアザラシの毛皮交易を例としてあげよう(Wenzel 1991)。アザラシの肉はイヌイットの主食の一つである。親族関係を基に組織された狩猟集団によってアザラシが捕獲された後、その肉はいくつかの決まったやり方にしたがって、拡大家族内や間で分配されたり、贈与されたりした後に消費された。これらの分配や贈与を通して特定の社会関係が維持された。一方、アザラシの毛皮は、ハドソン湾会社や生協に売ることができ、現金収入をえることができた。この現金収入を利用して食料獲得活動に必要なライフルの銃弾や、スノーモービル、船外機のガソリンなどを購入することができた。このように現代の社会的脈絡において現金、生業と社会関係との間にある相互依存関係が、社会関係の再生産を可能にさせたのであった。この条件は、1983年にヨーロッパ共同体が、絶滅の恐れのある毛皮獣の輸入を全面的に禁止し、毛皮交易が実質的に崩壊するまで続いていたと考えられる。

毛皮交易の実質的な終焉は、生業従事者の現金収入の激減を意味し、ひいてはそれに依存する食料獲得活動の衰退が社会関係の大きな変化を引き起こすことを予想させるものである。

ここでは、カナダのイヌイット社会でここで述べたような変化が起こっているかどうかを、ヌナヴィク地域(ケベック州極北部)のイヌクジュアク村とアクリヴィク村を事例として検証してみたい。

3. ヌナヴィク・イヌイットの社会変化

イヌクジュアク村は、ケベック州北部のハドソン湾に面したところにあるイヌイットの村である。その位置は、北緯58度27分、西経78度5分である。この村の人口は、1996年1月の時点で、1178名、世帯総数は244世帯である。ヌナヴィク地域にある15の村としては、3番目に大きな村である。

アクリヴィク村はイヌクジュアク村からさらに北にあり、その位置は北緯60度48分19、西経78度8分にある。この村の人口は、1996年6月の時点で411名、世帯総数は87世帯である。

両者の間には人口的な差以外に、後者は狩猟・漁労場に近いという大きな差がみられる。

3-1 歴史的概要

ヨーロッパからの移民が新大陸に移住する以前からイヌイットは、森林限界以北の植生のとばしい寒冷ツンドラ地域を主な生活領域としてきた。かれらは極北の自然資源をフルに活用しながら自給自足に近い生活を送ってきた。しかし、毛皮交易の開始、キリスト教化、結核など伝染病の蔓延による人口の激減などを歴史的契機としてかれらの生活は大きく変わってきた。

ヌナヴィク地域の場合、1910年代にはイヌイットは毛皮交易に深くかかわり、1930年代までにはキリスト教を信仰するようになっていた。また、1930年代後半から1940年代にかけては結核が猛威をふるったために、カナダ政府は病気に苦しむイヌイットの医療救済に乗り出した。

イヌクジュアク村周辺では1950年前後がひとつの転換期であった。すなわち1947年にはカナダ政府の看護所が建設された。1948年からは家族扶養手当がイヌイットに支給されるようになり、1951年には小学校が建てられた。これらは政府の介入の本格的な開始であった。

1950年代に入り、カナダ政府は行政の効率化を図るために、分散して移動生活を送ってきたイヌイットを特定の村に定住化させる政策を実施しはじめた。そして1972年までにこの地域のすべてのイヌイットは村の中に住宅をもらい、そこで生活をおくるようになった。現在のアクリヴィク村の住人の祖父母は1950年代末から1960年代のはじめに、プヴニツクに移り住み、20年あまりをそこで過ごしてから1970年代の半ばに現在の場所に移動し、新しい村を設立した。

1970年代までカナダ政府やケベック州政府によって、「福祉植民地主義」とよばれる保護政策や同化政策（国民化政策）が強力に推進された。しかし、1970年代に先住民諸権益請求運動が本格化し、カナダ政府も先住民諸民族と政治的な話し合いを持つようになった。

1971年に当時のケベック州首相のロベール・ブラッサがジェームス湾地域における水力発電開発計画を宣言した。これが契機となりその地域に住むイヌイットとクリーと、ケベック州政府の間で、土地権をはじめとする先住民権についての政治的な話し

合いがはじめられ、1975年11月に「ジェームス湾および北ケベック協定」が当事者間で締結された。先住民側は、一切の先住民権を放棄するかわりに、生業権など特定の権利、一部の土地の所有権や補償金などを得た。この時に、ハンター・サポート・プログラムがケベック州政府によって制定され、1983年より実施されはじめたのである（注4）。

くしくも同じ1983年にヨーロッパ共同体（EC）によるアザラシの毛皮の輸入禁止が実施され、毛皮市場が崩壊したためにイヌイットの生業従事者は現金収入源をひとつ失ってしまった。カナダ全体の経済不況とあいまって、イヌイットの生活は苦しくなってきた。ガソリンやライフルの銃弾を満足のいくように入手できなくなったために、以前のように頻繁に食料獲得活動に従事できなくなったのである。

この状況は、社会の大変化を予想させるものである。では、経済と社会の変化はどのようなであろうか。

3-2 経済構造の変化

散発的なヨーロッパ人との接触により、イヌイットとヨーロッパ人（捕鯨者、探検家や漁民）との間には物々交換による交易がみられたことは事実であるが、イヌイット社会全体にきわめて大きな影響を及ぼしはじめたのは、ホッキョクキツネやアザラシの毛皮の交易の開始である。ケベック北部の森林限界地域では、インディアン相手の交易所がクージュアラピクとクージュアックに開設されており、19世紀の後半にはすでにケベックのイヌイットは何らかの形で毛皮交易に係わっていた。1910年代からは極北の各地に交易所が開設された。これはイヌイットが世界システムに接合されはじめたことを意味する。

それまでの生業活動に加え、交易用のホッキョクキツネの毛皮を入手するための罾猟がイヌイットの重要な経済活動として加わるようになった。しかし、従来の生業活動と罾猟はかならずしも相容れない活動ではなかった。イヌイットは、食料獲得のための活動を罾猟に優先していたし、毛皮交易によって入手した道具や器材はかれらの生活や狩猟漁労活動の効率をよくした。

1940年代の終わりには、家族扶養手当の導入、滑石カーヴィングの制作、販売が加わり、ケベックのイヌイットは、貨幣経済にさらに深くかかわるようになった。1958年にイヌクジュアックで調査を行ったウイلمット（Willmott 1961）は、生業経済の領域と貨幣経済の領域が併存していることを報告している。

1960年代にイヌイットが定住村落に一年を通して住むようになり、村内で賃金労働につく人が増加するにしたがい、また国民経済や国家に経済的に依存するようになるにつれて、相対的に貨幣経済の重要性は増大していった。イヌイットは、政府が支給する福祉金、賃金労働からえた賃金、滑石彫刻を制作し、売ってえた現金、アザラシやホッキョクキツネの毛皮を売ってえた現金がおもな収入であった。

1983年の毛皮市場の崩壊は、生業従事者の経済状態を悪化させた。また、1990年代には腕のよいイヌイットが作ったカーヴィング以外は、生協やノーザン・ストア（旧

ハドソン湾会社) が買いとらなくなり、多数のイヌイットは収入源を一つ失うことになった。

1990年代においてもイヌイットのイデオロギーの上では、生業経済が貨幣経済よりも勝っているが、現実には貨幣経済の方がはるかに重要になりつつある。しかしイヌクジュアク村やアクリヴィク村など現在のイヌイットの村では、貨幣経済が重要で現金収入の確保がイヌイットにとって関心事であるにもかかわらず、村の中にある定職数は限られており、大問題になっている。例えば、1995年の統計によるとイヌクジュアク村にはフルタイムの定職が152、パートタイムの定職が80、そして季節的な土木工事の仕事が97ある。人口1200名弱の村では、フルタイムの定職数(152)が世帯総数(244)よりもすくない。イヌクジュアク村の可労働者のうち2人に1人は仕事に就きたくても村の中には職がないのである。

1920年代から1990年代までのイヌクジュアク村やアクリヴィク村のイヌイットの経済構造の変化を要約すると、生業中心の経済から、生業＝貨幣経済へ、そして貨幣経済中心の経済構造へと変化してきたといえる。この経済構造の変化は、社会構造の変化とどのように連動しているのだろうか。

3-3 社会構造の変化

イヌイット社会の大変化は、毛皮交易と定住化によってもたらされたといっても過言ではない。

ヌナヴィク・イヌイットが本格的に毛皮交易にかかわり始める1910年代以前には、他の地域のイヌイットと同様に、冬は海氷上でアザラシを狩猟し、夏には海岸部や河川でホッキョクイワナをとったり、内陸でカリブー猟を行ったりしていた。夏には、数世帯からなる大家族集団がキャンプの単位となり、狩猟上の協同作業や食物分配が行われていた。冬には、大家族集団がいくつか集まってキャンプを形成し、その中のハンターが協力して海氷上でアザラシ猟に従事した。冬のキャンプでは、配偶者交換パートナー関係、冗談パートナー関係、ダンスや歌のパートナー関係、同名者関係や助産人関係などの自発的なパートナー関係が親族関係がない人間同士や大家族集団間を結び付ける社会的に重要な機能を果たしていた(注5)。

毛皮交易のためのホッキョクキツネの罾猟が盛んになる1920年代から定住化が始まる1960年代の初頭まで、イヌイットは夏と冬の移動パターンとキャンプ集団の形成に変化が見られた。すなわち、夏の生業活動とキャンプ集団は、毛皮交易期のものと大差がないが、冬になっても海氷上でアザラシ猟のための大型キャンプ集団を形成せずに、夏キャンプ集団単位で海岸部にとどまり、そこから内陸や海岸部でホッキョクキツネの罾猟を行ったり、海氷上へ少人数で行きアザラシを狩猟していた。冬には近くの交易所を訪れ、ホッキョクキツネやアザラシの毛皮を売り、紅茶、小麦粉、ライフルと銃弾、鉄製のやかん、布地などを入手していた。キャンプ生活の基本単位は、大家族集団であったといえる(岸上1996b:734-737)。

1960年代以降、イヌイトが村落で定住生活をはじめたが、これは近隣の複数の拡大家族集団が1カ所に集合して生活をとにもすることを結果した。生業活動も、季節に応じて、村からキャンプにいたり、日帰りで狩猟・漁労に行ったりするようになり、年がたつにつれて村が生活の中心地へと変わっていった。社会構造の変化で興味深いのは、同名者関係と助産人関係を除く自発的なパートナー関係が機能しなくなったり、消滅してしまったことである(岸上 1990、1996c、1997)。一方、村に集まってきた拡大家族集団間では通婚によって関係が結ばれたりしたが、各拡大家族集団は相互扶助や食物分配の単位であり続けた。狩猟漁労活動の集団はスノーモービル、船外機付きボート、高性能ライフル、化繊漁網の導入により、小規模化し、個人や親子、兄弟、いとこどうし(や友人どうし)から形成されるようになった。世帯も核家族化ないし小世帯化が見られたが、社会経済的には世帯の集合である拡大家族集団が機能の単位であった。このことは、1990年代のイヌクジュアク村やアクリヴィク村にもあてはまる。筆者の両村での調査によると、拡大家族関係は現在でも、相互扶助や食物分配のうえで機能している社会関係である(岸上 1996b)。

イヌイト社会では、大半の自発的なパートナー関係が実質的に消滅した一方で、拡大家族(関係)集団は、定住化以前の時代と変わりなく、重要な単位として存続している。

ここで、次のような疑問にぶつかる。すなわち、イヌイトの、経済構造が変化したにもかかわらず、拡大家族関係がなぜ機能単位として存続し続けているのか、言い換えれば、社会関係がなぜ基本的に再生産され続けてきているのかである。この答えは、ヌナヴトのイヌイトの場合は、従来の食物分配が実践されていること以外に、ハンター・サポート・プログラムの導入と実施に関係があると私は考えている(岸上 1993、1995a)(注6)。

4. ハンター・サポート・プログラムの実施と社会の再生産

北ケベックのイヌイト社会において経済構造や外的な環境条件が変化してきたのにもかかわらず、その社会構造が自発的パートナー関係を除けば、基本的に維持され続けているのは、従来通りの食物分配の実践とともに、ハンター・サポート・プログラムによる村レベルでの食料の供給と食物分配の実践のためであることを例証してみたい。さらに、ハンター・サポート・プログラムの実施が生み出しつつある変化についても指摘したい。

4-1 ハンター・サポート・プログラムについて

ハンター・サポート・プログラムは、「ジェームス湾および北ケベック協定」の締結の結果、ケベック州政府が1982年12月に法案83として制定したものである。特筆すべき点は、このプログラムはイヌイトが主体的にケベック州政府に提案し、話し合を経て作り上げられたものであることである。

このプログラムの目的は、イヌイトの狩猟や漁労、罨猟など食料獲得活動を促進

し、長期的に維持させ、かつそのような活動から得られる産物をイヌイットに供給することを保証することであった。そのプログラムの運用は、原則的に各村にまかされており、村用の大型コミュニティー・ポートや大型冷蔵庫を購入したり、魚や肉をハンターや隣村から購入し、村人にそれを無償で提供することが可能となった。

プログラムの予算は、ケベック州政府からカティヴィク地方政府に支出され、さらに各村に配分される。この予算は、毎年、必要性、インフレ率、イヌイットの人口増加率に基づいて修正が加えられている。

ちなみに、イヌクジュアク村の予算は、1989年が約21万ドル、1990年が約26万ドル、1991年が約30万ドル、1992年が約31万ドル、1993年が約40万ドル、1994年が約45万ドル、1995年が約34万ドル、そして1996年が約36万ドルであった。一方、アクリヴィク村の予算は、1989年が約11万5千ドル、1990年が約13万9千ドル、1991年が約14万2千ドル、1992年が約15万ドル、1993年が約18万2千ドル、1994年が約13万5千ドル、1995年が約20万8千ドル、1996年52万3千ドルであった。

4-2 イヌクジュアク村の事例

イヌクジュアク村では、ハンター・サポート・プログラムをいろいろな活動のために利用している(岸上 1996b:745-751)。ここで特に紹介しておきたいことは、2つの事業である。ひとつは村がハンターをこのプログラムで雇い、狩猟や漁労に派遣し、とってきた獲物を必要な村人に無償で提供している。もう一つは村のハンターから余剰の獲物(魚や肉)を買い取り、それを村の冷凍庫に保存しておき、村人の中で食料の必要な人には、無償で提供している。1996年の前者の年間予算は2万5千ドル、後者の年間予算は6万5千ドルであった。このようなハンター・サポート・プログラムを利用した村レベルでの食料の供給は、狩猟漁労活動が衰退している現在のイヌクジュアク村では、とくに経済的に重要である。

私が1996年の1、2月に観察した事例を紹介してみたい。

1月から3月にかけての冬場には、村のプログラム担当官が、毎月2千ドルの予算で狩猟チームの派遣を行っていた。カリブー猟の場合は、6人で1チームが編成される。メンバーは、村内用のFMラジオ放送を通じて村人から公募によって集められる。この狩猟チームの構成員は、募集のたびに異なる。また、親族によって編成されることもない。

1996年2月1日にカリブー狩猟チームが派遣され、2月5日の午後13時に30頭あまりのカリブーをしとめ、帰村した。カリブーは狩猟場で解体され、肉、枝角、毛皮に分けられて、そりに乗せられて村に持ちかえられた。これらの獲物は、一度、村役場の隣にある冷凍庫に運び込まれた。また、途中から村の担当官が肉をトラックの荷台につまはじめ、彼はトラックの荷台がいっぱいになると、それを運転し、老人や身体障害者がいる世帯40件に配ってまわった。一方、村のFMラジオの放送を通して、カリブー肉の必要な人は村の冷凍庫に取りに来てよいと告げた。村人は、徒歩やスノーモービ

ルで冷凍庫にやってきて、1人あたり5~10kgくらいずつ持っていった。放送から1時間もしないうちに村の冷凍庫から肉がなくなってしまった。

また、ハンター・サポート・プログラムを利用して1993年ころから秋にハドソン湾のマンセル島に4人のイヌイットを飛行機をチャーターして派遣し、2トン以上のホッキョクイワナを毎年とりに行かせている。この魚は村人に無償で提供されるが、約1週間分の食料になるという。

このハンター・サポート・プログラムを利用した食料の無償提供は、もっとも効率よくこの制度を現行のままで運用すれば、通年で最大150日分の村人の食料を供給できると私は見積もっている(岸上 1996b:752)。一度食料が村人に供給されると、それはさらにイヌイットの間でいろいろな機会に分配されるのである。

4-3 アクリヴィク村の事例

1984年から1986年までのアクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムについてはすでに報告したことがある(岸上 1993)。この村では1989年以降、コミュニティー・ボートを利用したカリブー狩猟遠征などは取りやめられており、変化が見られた。ここでは1997年のプログラム実施例を紹介する。

現在のこのプログラムを利用した主要な事業は、コミュニティー・ボートの利用・管理、9月後半から10月初めにかけて約1週間の期間で実施されるセイウチ猟、10月に約1週間実施されるシロイルカ猟、ハンターからアザラシ、カリブー、ライチョウ、二枚貝を買い取り、村人に分配することなどである。

1月と2月には、村はこのプログラムを利用してアゴヒゲアザラシとワモンアザラシを1ポンド(453グラム)2ドル50セントで村のハンターから買い取り、老人、寡婦の世帯に配布する。肉が大量にある場合には、一般世帯にも分配される。1世帯につき15ポンド余りを配布すれば、2、3日の食料になる。村は、1ヶ月平均アゴヒゲアザラシ5頭と、ワモンアザラシ10頭あまりを購入し、村人に提供している。

3月と4月には、カリブーとアザラシがこのプログラムによって村のハンターから買い取られ、老人と寡婦の世帯を中心に分配される。3月の初めにはアザラシが、3、4月にはカリブーがプログラムの対象となる。カリブーは1頭単位で村のハンターから買い上げられる。メスは1頭110ドル、若いオスは1頭110ドル、成獣のオスは1頭100ドルである。1ヶ月あたり40頭ほどのカリブーを村は買い上げる。10から15頭のカリブーがあれば、村全体の世帯に肉を分配できる。

5月から8月にかけては、アクリヴィク村の周辺では、多数のカナダ・ガンや白ガンが飛来するうえに、多数の魚が湖や沿岸部におり、食料が豊富な時期である。この時期にはハンター・サポート・プログラムを利用した村人への食料の供給は行われていない。

9月には、予算があるかないかにもよるが、プログラムを利用した獲物や魚の買い取りは頻繁ではない。ホッキョクイワナやホワイト・フィッシュを1ポンドあたり2ド

ヌナヴィク・イヌイットのハンター・サポート・プログラムの運用と社会変化

ル50セントで購入し、必要な村人に提供する。また、アザラシの肉をハンターから購入し、村人に提供することもある。

9月中旬から10月の初めまでの1週間、セイウチをとるために村は、ハンター6人をこのプログラムを利用してノッチングム島へ派遣する。ハンターのうち2人はコミュニティー・ボートを動かすキャプテンと副キャプテンである。残りの4人は、村のハンターの中から村長や村会議員によって選ばれる。1997年には、村人の一人が所有する大型ボートもセイウチ猟に参加した。村はハンター・サポート・プログラムを利用してこの2隻の大型ボートにそれぞれ200ガロン（約760リットル）のガソリン、1000ドル分の食料と銃弾を提供した。また、乗組員には賃金を支払った。村所有のボートの場合には、キャプテンに1週間で800ドル余り、その他の乗組員には1日50ドルから100ドルの日当が支払われた。個人所有のボートの乗組員の場合は、すべて一律に50ドルから100ドルの日当が支払われた。

このセイウチ猟では、参加したハンターはセイウチの牙しかとることができず、肉に関しては他の村民と同じ分量を受け取る。少なくとも5頭のセイウチが村に持ち帰られると、1世帯あたり100ポンド余りの肉を分配することができる。また、ボートが村に帰ってくると、近くの海岸で村人全員で宴会が行われる。

10月には、1週間くらいかけてシロイルカ猟遠征がコミュニティー・ボートを利用して行われる。かつてはハドソン湾の南東の奥にあるリッチモンド湾まで遠征していたが、1994年ころから狩猟場をイヴイヴィク (Ivujivik) の近くに変更した。1997年には予算がなかったので、村のボートを派遣することはできなかった。その代わりに村に2隻ある個人所有の大型ボートが出猟した。村ではハンター・サポート・プログラムからガソリンと500ドルの食料と銃弾をそれぞれのボートに提供した。1997年には、この遠征狩猟に参加したハンター一人ずつにアクリヴィク生協が100ドルの現金を支払った。

この猟に参加したハンターには、優先的にシロイルカの脂肪のついた皮の部分（マッターク）の5%が配分される。残りのマッタークと、肉が84世帯全部に平等に分配される。1ヶ月間くらいシロイルカのマッタークや肉を村人は楽しむことができる。

11月にはクーヴィクで2週間あまりのホッキョクイワナ漁が行われる。最近では、村が村人を派遣するのではなく、そこに漁に行った人から余剰の魚を買い取り、村全体に分配する。村は5000ドルの予算で2000ポンドの魚を買い取る。10人ほどの村人が、4、5匹の自家用分を除いた獲物を村に売る。村はそれを全世帯に分配する。1世帯あたり10匹程度のホッキョクイワナを分配することができる。また、同月にはカリブーが買い取られ村人に提供されることがある。

12月にはクリスマスの祝宴のために村はハンター・サポート・プログラムを利用してホッキョクイワナを500ドル分買い取る。

以上が、アクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの1年である。このプ

ログラムは、村人への食料の供給以外に、遭難救助（年間予算1万ドル）、コミュニティー・ボートの修理、スノーモービル用や四輪駆動のバギー用の狩猟用道を作ること、カヌーの水路を深くすること、若者に老人がイグルーの作り方やサバイバル術を教えることなどにも利用されている。

アクリヴィク村の場合も、イヌクジュアク村の場合と同じく、このプログラムによる村人への食料の無償提供は、寡婦、老人や賃金労働従事者にとっては特に有効に機能しており、村人から高い評価を得ている。一方で、このプログラムにイヌイットが依存しすぎることに由来する弊害も指摘され始めている。かつてはイヌイット同士でみんなが食物分配を行っていたが、ハンター・サポート・プログラムは分配や相互扶助のパターンに変化を生じさせ始めている。それは家族関係や親族関係の変化につながってきているという。食料がない時には、イヌイットはみんなで助け合い、食物分配をしていた。ところが、現在の村人は食料がない時にはハンター・サポート・プログラムに依存するようになってきている。また、遭難した時の救助でも、例えば、村から20マイル離れた所でスノーモービルが故障して村に帰れなくなった時には、昔ならばその人の兄弟や親族が助けにいていたが、現在では、遭難救助はハンター・サポート・プログラムによってなされている。このようにハンター・サポート・プログラムは村の食物分配を衰退させたり、社会関係を変化させたりしているという問題をはらんでいる。しかし、ハンターの生業活動や村人の生活を補助するという機能があり、必要なものという認識が村人の間で共有されている。

4-4 ハンター・サポート・プログラムと食物分配、社会の再生産

ヌナヴィク地域のイヌイットの村では、ハンター・サポート・プログラムによる食料の村人への分配（供給）、ハンター間の獲物の分配、ハンターと村人の食物（獲物）の分配、食事を通しての食物分配などが見られる。これらの実践と社会関係とはどのような関係にあるのだろうか。

イヌクジュアク村においてもアクリヴィク村においてもハンターは猟場で獲物の分配（ningiqtuq）を行っている。例えば、あるアクリヴィク村のハンターは1998年の1月に猟場の近くで出会った4人のハンターといっしょにアザラシ猟を行った。その時には彼だけがアゴヒゲアザラシ1頭しとめた。アザラシの肉と脂肪は5人がほぼ平等に分配し、その毛皮はほしい人が持っていった。しとめたハンターは心臓の部分を取ったが、小腸などは平等に分配した。このようにハンターの間では獲物の分配は実践されている。

問題は、狩猟具の機械化と効率化によって複数で狩猟にでかける必要がなくなったこと、すなわち狩猟単位の個人化、若者の生業離れである。ハンター間の獲物の分配の頻度は減少しつつあるといえる。

アゴヒゲアザラシをしとめたそのハンターは、村に帰ってから、FMラジオ放送を通して村人に彼がアゴヒゲアザラシを取ったこと、その肉の欲しい人は彼の所まで取

りに来るように告げた。この知らせによって村人の何人かは彼の家を訪れ、肉をもらって帰った(aitsijuk, minartuq)。さらに彼は近所の親戚や友人の所に肉を持っていった(paruttuq)。

私が下宿した家では、主人がライチョウやホッキョクイワナを多量に獲って帰ってくると、息子に獲物の一部を近所の寡婦、老人、兄弟姉妹の所に持っていかせていた。中高年のハンターの世帯では、このような食物分配は日常的に行われている。

さらにハンターは、他の人を食事に招いたり(kaikurik)、他の人が彼の家に食事に來たりする(nirigiaqtutuk)。ハンターが獲物をあげたり、食事を通して獲物を分配している関係は、兄弟姉妹、両親、オジオバなど拡大家族関係にある人、近所の引退した老人や寡婦などであった。

アクリヴィク村においては1998年1月から2月にかけての調査によると、ハンターの世帯においては1990年の12月に観察された事例(岸上 1992)と同様に、拡大家族内や近隣の世帯間で食物分配が実践されていた。

私が観察した限りでは、中年以上のハンターがいる世帯では、獲物の分配や食事を通しての食物分配は実践され続けていたが、ハンターの絶対数が減少している現在、従前通りの食物分配で、すべての社会関係が再生産されるとは考えられない。

現在のイヌクジュアク村では、狩猟・漁労活動はかつてほど盛んではない。個人のハンターが村の中に持ち込み、分配され、消費される肉や魚の量は減少している。このため、従来の拡大家族関係のラインにそった食物分配の頻度や量も減っている。ところが、ハンター・サポート・プログラムによる食料の村人への無償提供は、個人レベルの狩猟・漁労活動の低下を、補なうことになり、一度、村人に分配された肉や魚は、主にイヌイットの拡大家族関係のラインにそって分配され続けている。このことは、アクリヴィク村の場合にもあてはまる。個人レベルの狩猟・漁労活動は衰退したのにかかわらず、村レベルでの食料の供給により、二次的な食物分配は実践されつづけているのである。

この村レベルの食料の供給(分配)は、一種の村レベルでの食物分配でもあるが、親族関係に基づいているというよりは、村人であることに基づいて実践されており、村人意識やイヌイットはお互いに助け合う人間だというイヌイット意識の高揚に貢献している。

ハンター・サポート・プログラムでは狩猟や漁労と、その獲物の第一次分配が、特定の社会関係に則らなくなってきた。40歳以上のイヌイットは、ハンター・サポート・プログラムが村人全員の生活に貢献するような経済効果があることを認めつつも、食物分配のやり方が変化しつつあることに危惧を表明している。彼らにとっては、食物分配とは彼らが生き延びるための唯一の方法であるという認識を強く持っている。ところがこのプログラムによって村人は肉や魚を、特定できないし見えない個人、すなわち村から受け取るようになったため、肉や魚をもらった人は、それらくれた人

に対食物分配する責任や義務感から解放されるようになったのである。さらに生業活動に従事しない若者の一部は、肉や魚をプログラムによってもらう一方で、他の人に肉や魚を分配しない人が出現し始めているのである。

しかし、私が観察した限りでは、ハンター・サポート・プログラムによって個人や世帯が一度、入手した肉は、さらに二次分配されている。この場合には、従来通りの社会関係の線に沿って食物分配が行われているのである。また、中高年のハンターは従来どおりの食物分配を実践しており、彼らにかかわる社会関係はある程度、維持され、再生産されている。食料が十分に村人に供給されている限りは、彼らが狩猟・漁労に従事しなくなっても、食物分配は行われ、その実践を通して社会関係は再生産されると思われる。

アクリヴィク村やイヌクジュアク村においては中高年のハンターの間では、ハンター一間の獲物の分配、ハンターと村人との獲物の分配、食事を通しての食物分配は、その頻度や量は減少してきてはいるが、現在でも実践されており、ハンターをめぐる社会関係は維持され、再生産されている。しかし、若者の生業離れによってハンターの絶対数が減少しているため、一部の食物分配のみでは村の中にある社会関係をすべて維持、再生産させることは困難になりつつある。

ハンター・サポート・プログラムによる食料の供給は、従来の食物分配とは異なり、社会関係にもすでに指摘したような変化を生み出しつつある。しかし、私の観察によれば、その制度によって一度、個人や各世帯に提供された肉や魚は、さらに拡大家族関係の線に沿って、二次分配が繰り返される。したがって、このプログラムによる肉や魚も日常の食物分配の実践に貢献していると言える。すなわちこれらの村では、日常の食物分配の実践を通して、村の中の社会関係が維持され続けているのである。そのような実践を可能にさせる条件は、急激な変化のまっただ中にいるイヌイトにとっては変化の緩衝剤となると言えるだろう。

5. 結論

イヌクジュアク村の事例は、個人レベルの食料獲得活動が衰退してきたのにもかかわらず、ハンター・サポート・プログラムの制定、運用によって村レベルでの食料供給が可能となり、拡大家族関係に基づく食物分配の実践の維持によって拡大家族関係が再生産されてきたことを示している。また、このプログラムの実践によってあらたに村人意識やイヌイト意識が顕在化してきている。社会は変化を続けている一方で、拡大家族関係は再生産され続けているのである。

ハンター・サポート・プログラムは、生業に従事しない若者に対しては食料を与えるだけで、それらの若者自身はそれ以外の人とは食物分配をしないという弊害が出てきている。このプログラムへの依存化は、従来の食物分配の制度に変化を迫っており、ひいては社会関係の変化を生み出す要因の一つになっていると言える。

狩猟や食物分配の実践に関して若者層に変化の兆しが見られるので、イヌイット自身が集団的に意図的な努力をしない限りは社会関係は大きく変わって行くだろう。しかし、ハンター・サポート・プログラムのような制度の創出と運用は、社会の維持や緩やかな変化を可能にさせる。イヌイットのこのような制度の意図的な利用は彼らの将来を大きく左右すると私は考えている。

ヌナヴィク地域のイヌイット社会の事例は、物理的な社会の消滅や強制的な社会変革を除けば、先住民(狩猟採集民)社会がおかれる条件しだいでは、国家や世界システムにとりこまれようとも、社会の独自性の持続ないし独自の社会関係の通時的な再生産が可能であることを示している。その条件とは、先住民との協議によってつくられる政府の先住民の生業政策の実施であり、先住民自身の主体的かつ能動的な生業の実践であると考えられる。

私は、カナダ・イヌイット社会の研究にもとづいて、国民国家の中で暮らす狩猟採集民の社会変化について次のような仮説を提起したい(注7)。

カナダ・イヌイットのような国民国家の中に組み込まれている先住民は、主流側との間に明確な政治経済力の差が存在する場合には、主流側の政策の影響を受けるにしがたい、政治経済的に国家や国民経済への依存度を高める。しかし、この変化は必ずしも先住民の社会関係および民族意識の消滅や弱体化を結果するとはかぎらない。(主流社会) 国家の先住民政策や、先住民の能動的な政治および経済的な実践により経済活動が社会的に構成されつづけている限りは、もろもろの変化を被りつつも先住民独自の社会経済関係を再生産し続けることができる(岸上 1996a, b)。

(*) 本研究は、1998年1月から2月にかけてカナダ国ケベック州アクリヴィク村において実施した調査の成果の一部である。この調査は、大阪大学言語文化部の大村敬一氏を代表とする平成9年度国際学術調査「イヌイットの社会・文化の変化に関する民族学的研究」(課題番号07041026)の一部として実施された。アクリヴィク村においては、AdamieとAmalyのAnautak夫妻から格別の助力を得た。記して感謝する次第である。また、この調査を可能にしてくれた大村敬一氏と日本国文部省に対し感謝の微意を表すものである。

注

(注1) このほか欧米人との接触の期間ややり方、村の地理的位置、村の中の白人の人口数などの条件の違いによっても社会変化の多様性が生み出される。

(注2) 社会変化モデルには、Graburn(1969, 1971)やBalicki(1960, 1964)らの研究がある。一方、1970年代後半以降のアラスカ、カナダやグリーンランドの極北社会の研究からは、Fienup-Riordan(1983)、Nuttall(1992)、Wenzel(1991)らの社会の再生産モデルがある。

(注3) イヌイットやユピックの生業に関する諸研究については、岸上(1994:74-79)を参照されたい。

(注4) 1970年代はじめには、ホッキョクキツネやアザラシの毛皮の価格が低迷していたために、イヌイットは獲物の毛皮を売って現金を手に入れ、それを利用して狩猟や漁労を続けることは難しくなっていた。しかし、当時のイヌイットは、生業の維持を強く望み、ジェームス湾協定の中で、イヌイットの生業を促進するような生業プログラムの創設が提案された。

(注5) カナダの中部極北地域のネツリック・イヌイットやコパー・イヌイットの間ではアザラシ肉の分配パートナーが存在していたが、北ケベックのイヌイット社会にはそのような特殊なパートナー関係は存在していなかった。

(注6) ハンター・サポート・プログラムの実施されていないヌナウトのペリーベイ村のような場合にも、私はすくなくとも1990年代半ばまでは、生業活動の維持によって大家族関係は基本的に再生産されてきたと考えている(岸上、スチュアート 1994、岸上 1995b, 1996 a)。

(注7) この仮説は、ピーターソンの仮説(Peterson 1991:2)をイヌイットの事例にもとづいて特殊化したものである。

引用文献

Balikci, A.

1960 "Some Acculturative Trends among the Eastern Canadian Eskimos". Anthropologica(n. s.) 2(2):139-153.

1964 "Development of Basic Socioeconomic Units in Two Eskimo Communities". Anthropological Series 69. National Museum of Canada Bulletin 202. Ottawa.

Fienup-Riordan, A.

1983 The Nelson Island Eskimo. Anchorage:Alaska Pacific University Press.

Graburn, N. H. H.

1969 Eskimos Without Igloo. Boston:Little, Brown.

1971 "Traditional Economic Institutions and the Acculturation of the Canadian Eskimos". In G. Dalton(ed.), Studies in Economic Anthropology, Washington, D. C.:American Anthropological Association. pp. 107-121.

岸上伸啓

1990 「カナダ・イヌイットの人名、命名方法および名前に基づく社会関係について」『民族学研究』54(4):485-495.

ヌナヴィク・イヌイットのハンター・サポート・プログラムの運用と社会変化

- 1992 「現代カナダ・イヌイット社会における食物分配をめぐる社会関係について」『人文論究』54(別冊):181-198.
- 1993 「イヌイット社会における食物分配の一形式について」菊池徹夫ほか編 pp. 309-317. 『21世紀への考古学』雄山閣出版
- 1994 「北米におけるイヌイットおよびユピックに関する文化人類学的研究の最近の動向と現状について」『人文論究』58:53-105.
- 1995a 「カナダ国ヌナビック・イヌイットの社会経済変容」『人文論究』60:81-99.
- 1995b "Extended Family and Food Sharing Practices Among the Contemporary Netsilik Inuit". Journal of Hokkaido Univeristy of Education 45(2):1-9.
- 1996a 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在』言叢社 pp. 13-52.
- 1996b 「カナダ・イヌイットの社会・経済変化」『国立民族学博物館研究報告』21(4):715-775.
- 1996c 「カナダ・イヌイットの名前、名前の靈魂と社会変化」『北海道教育大学紀要第1部B』46(2):27-37.
- 1997 「カナダ・イヌイットの助産人と社会変化」『民博通信』75:107-122.
- 岸上伸啓、スチュアートヘンリ
- 1994 「現代ネツリック・イヌイット社会における社会関係について」『国立民族学博物館研究報告』19(3):405-448.
- Nuttall, M.
- 1992 Arctic Homeland. Toronto:University of Toronto Press.
- Peterson, N.
- 1991 "Intoroduction". In N. Peterson and T. Matsuyama (eds.), Cash, Commoditisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies. 30:1-16., Osaka:National Museum of Ethnology.
- Wenzel, G.
- 1991 Animal Rights, Human Rights. Toronto:Univeristy of Toronto Press.
- Willmott, W. E.
- 1961 The Eskimo Community at Port Harrison, P. Q. (NCRC-61-1). Ottawa:Dept. of Northern Affairs and Natural Resources, Northern Coordination and Research Centre.